歴史のまがりかど ①

江川坦庵

ー パン焼きの やくそくー

（一八五四、五年）

岡崎ひでたか

1

ミツにとって白髪（しらが）じいは、なぞの人だった。あのじいが野良で絵を描いていたとき、絵をのぞきに行ったら、おっ母（かあ）とおいらが、畑ではたらいている絵だった。

特大の眼と鼻、白髪まっ白なのにじじいらしくない。

「ミツと申すか。よう手伝っておるの。何歳になる」

ときくから、いってやった。

「十一だ。だけど手伝いなんかじゃない。おらの仕事だ。こんど、牛で畑やってるところ、絵に描いてくれよ」

白髪じいは、でっかい目玉を、やんわりさせて言った。

「ほう、牛が使えるのか、たいしたものよ。どうじゃなミツ、わしのパンを焼く手伝いをせんかのう」

「パンって何だい。レンガ焼くのとちがうのかい」

韮山（にらやま）（伊豆の国市）では、鉄をとかす炉を建設中で、鉄をとかす火力に耐える、レンガ焼きがさかんだった。

「いや、パンはパン、レンガとは大ちがい。ほれ、これよ。ご飯の代りをするえらいやっちゃでの」

白髪じいは腰の袋から、丸くて平べったい、ふくらんだものをとりだして半分くれた。おいしそうな匂いがした。

「こっちの半分は、おっ母にやれ。どうだ、うまいか」

「ううん、あんまり、……うまくない、……こともない」

硬いし、うまくないが、よくかむといい味もしてくる。

「玉子や砂糖を使えば、おいしいカステーリャが焼けるが、これはな、洪水で困ったときとか、非常にそなえて貯えておくパンだ。しあさっての朝、巳の刻（午前十時頃）に代官屋敷にまいれ。どうかの」

ところがその日、十一月四日朝、すごい大地震がきた。

ミツは怖くて、お父（とう）のかわり、太い柱にしがみついていた。ミツの家は半壊れになったが、伊豆では、ほとんどの家がつぶれた。三島は大火事になって全滅したらしい。

変わらないのは、ゆうようとした富士山の姿だけだ。

その日、代官屋敷からあわただしく出てきた役人たちのうち、馬に乗った陣笠、陣羽織の武士が、ミツの前で馬を